

歴史と豊かな自然のある 対馬の魅力

対馬は、朝鮮半島を臨む国境に位置し、古代から受け継がれた重厚な歴史と豊かな自然のある島です。そして、豊かな自然の恵みを活かした生業が盛んでした。しかし、現在、少子高齢化や島外への流出による人口減少、植林など人為的要因による自然環境の改変、島の主要産業の衰退などの深刻な課題を抱えています。

大陸と日本の重要な接点として

対馬島の誕生

朝鮮半島と対馬は 10 万年前に離れ、日本列島とは 2 万年前に離れて対馬島が誕生したと推定されています。更新世の中頃までは、アジア大陸と陸続きで、その後、東シナ海が浸入してきて、更新世の末期には現在の朝鮮半島と日本列島との間が切れ、それまで大きな湖であった日本海が東シナ海に通じ、島が誕生したと考えられます。



史書にも登場する古い歴史

対馬がはじめて歴史書に登場するのは 3 世紀頃、中国の三国志時代の「魏志倭人伝」です。ここには、断崖絶壁が多く、山が深く、道は獣道のように細い。また、水田が少なく、海産物を食し、朝鮮半島や大陸と日本本土を小船で行き来して交易を行っていたことが書かれています。



朝鮮国信使船（正使部分）県指定重要文化財（県立対馬歴史民俗資料館蔵）

（出典：対馬自治連絡協議会（1999）、つしま百科）

縄文時代から続く日韓交流

対馬は、日本の中で朝鮮半島に最も近いという地理的条件から、大陸からの石器文化、青銅器文化、稲作、仏教、漢字などを伝える日本の窓口でした。また、朝鮮半島との間では古くから貿易などの交流が盛んに行われていました。この活発な交流から、対馬には数多くの書物、仏像、建造物、朝鮮式山城の金田城跡や古墳などの文化財が残っています。

朝鮮半島との友好な交流の歴史の中、1592 年～ 97 年の文禄・慶長の役で交流が中断してしまいましたが、対馬藩十万石の藩主・宗家は朝鮮との関係改善を図り、朝鮮通信使を江戸まで案内するなど日本と朝鮮の交流再開に努力しました。

20 世紀に入り、一時期、対馬と朝鮮半島との交流が中断した時代もありましたが、対馬にとって朝鮮半島は身近な存在であることは変わりありません。今では対馬と韓国の釜山が定期航路で結ばれるなど、文化、経済、教育の活発な交流が再開されています。

豊かな自然に囲まれた島の魅力

暖流に浮かぶ島

対馬は南北 82km、東西 18km の細長く、暖流である対馬海流の影響を受けた温暖な気候の島です。海岸は沈降と隆起によってできたリアス海岸で、その延長は 915km におよびます。島の 9 割は森林で、標高 200 ～ 300m の山々が海岸までせまっており、場所によっては 100m もの断崖絶壁もあり、勇壮な自然を目にすることができます。



美しいリアス海岸

壱岐対馬国定公園

壱岐対馬国定公園は、玄界灘に浮ぶ壱岐、対馬の両島の海岸部を主体にした公園で、対馬では、島の面積の約 17% が国定公園に指定されています。

浅茅湾の風景の美しい樹枝状のリアス海岸、下島龍良山のカシ、シイ類の原生林、白嶽のアベマキ、チョウセンヤマツツジなど大陸種の混じる原生林、御岳のモミ、ツガの原生林などが指定されています。

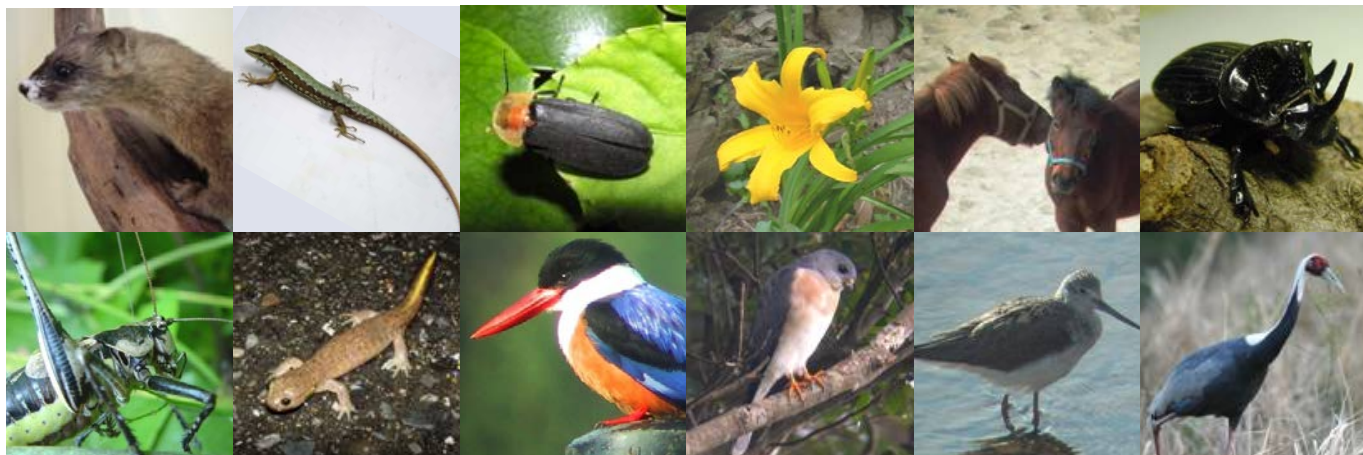
また、清流「瀬川」は、全体が天然の花崗岩でおおわれた全国でも珍しい景観を形成しており、この清流と自然の景観を生かした「鮎もどし自然公園」が 1994 年に整備されました。



鮎もどし自然公園

対馬でしか見られない動植物

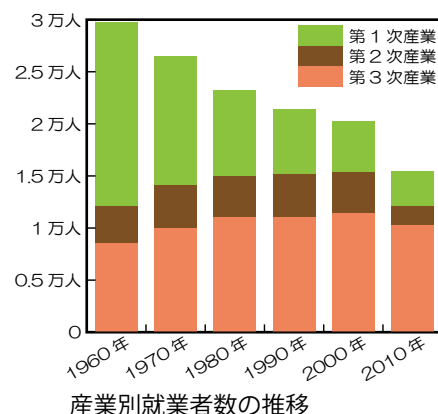
対馬の豊かな自然には、国の天然記念物のツシマヤマネコをはじめ、ヒメダイコクコガネ、ツシマフトギスなど、対馬でしか見ることのできない生物や、ツシマテン、ハクウンキスゲなど、大陸系の動植物が多く生息しています。また、アカハラダカ、アオアシシギ、マナヅルなど、渡り鳥の中継地であることから、世界でも有数の野鳥の観察地になっています。



自然の恵みを活かした生業の歴史

対馬は、豊かな海に囲まれた島であり、島の面積の9割が森林で、残りの少ない平坦地を利用して農地をつくる、自然の中での暮らしが営まれてきました。

第一次産業就業者数をみると、1970年頃までは全産業の約半数を占めていました。かつての対馬は、ほぼ自給自足の経済が成り立っており、豊かな自然の恵みの中で、循環型社会が形成されていたと言えます。



変化に富む豊かな海が育んできた水産業

対馬暖流と沿岸水が混合することでプランクトンや小魚などが豊富で、海底地形も東側のなだらかな傾斜と西側の急深な地形、沿岸には磯瀬が散在するなど変化に富んだ地形により、イカやブリなどの回遊性魚類の他、アワビやワカメなどの根付資源にも富んでいます。

また、森から河川を流れてくる豊かな栄養分を活かし、魚類や真珠などの養殖も行われています。



浅茅湾における真珠養殖の様子
(提供：(一社) 対馬観光物産協会)

島の9割を占める森林を活かした林業

島の面積の9割は森林であり、明治末期より、木炭生産が盛んに行われていました。しかし、熱エネルギー消費構造の変化に伴い、薪炭材の生産はしだいに少なくなり、それに代わる島おこしの一環として、スギ・ヒノキ植林が盛んになりました。この森林資源を活かして、島内のヒノキを中心とした木材の供給が行われています。また、しいたけ栽培も盛んで、乾しいたけ(原木)の生産量は、長崎県内の99%を占めています。



対州白炭(提供：(一社) 対馬観光物産協会)



対馬ひのき



原木しいたけ栽培

少ない平坦地を有効利用してきた農業

対馬には、佐護川沿いに佐護平野の水田地帯もありますが、全体的に平地は少なく、耕地面積は島全体の1.3%と非常に少ないのが特徴です。

そのため、「木庭作」という森林の中で焼き畑をして、ソバやムギを蒔いて農地を作ってきた歴史があります。



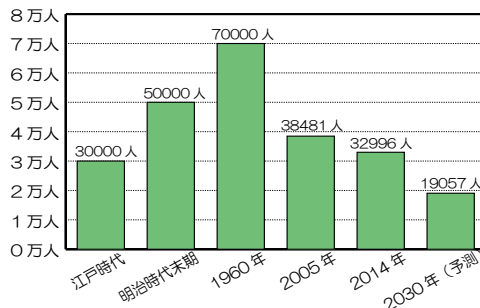
山間につくられた農地 (内山区)

対馬が抱えている課題

多様な魅力を持つ対馬ですが、人口、自然、生業のそれぞれの点で課題があります。

人口の減少

対馬の人口は、藩政期には3万人、明治末期で5万人、そして1940年で5.7万人、その後1960年まで増え続け、ピーク時には7万人近くまでになりました。その後、日本経済の高度成長に対応して人口が減少しはじめ、1973年には鉱山の閉山も影響し、現在はピーク時の半分以下となっています。さらに、高齢化率は22.8%と国や県の平均に比べて高く、若年層の島外流出が続いており、急速な少子高齢化が進んでしまいます。

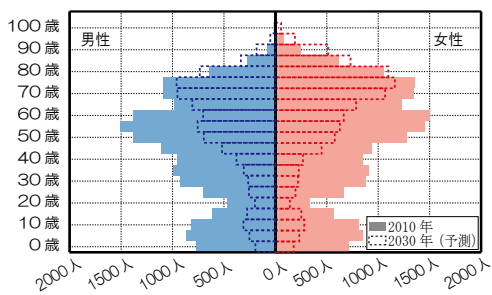


対馬市の人口の変遷

(2010年国勢調査、対馬市統計データ、平成25年度対馬市全小学校区等将来人口推計業務報告書より作成)

森から海へつながる自然環境の悪化

薪炭林の放置やその後盛んになったスギ・ヒノキ植林も、林業従事者の高齢化、後継者不足などにより、間伐などの管理が行われなければ、樹木が密生し、林床植生も貧弱になるなど、加速度的に荒廃が進んでしまいます。このような森林の荒廃は、生き物の棲みにくい環境につながるとともに、地力の低下、斜面崩壊などの被害が発生するおそれがあります。また、様々な要因で磯焼けが起こっていて、これまで海の森と呼ばれた豊かな海藻の海が失われており、陸と海の両面で、豊かな自然環境が悪化している現状があります。



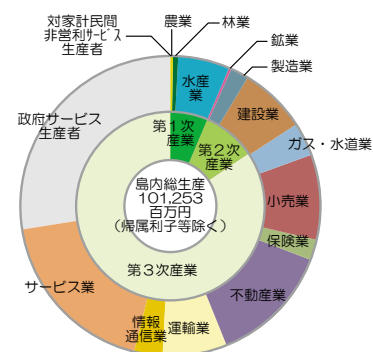
対馬市の人口ピラミッド

(2010年国勢調査及び平成25年度対馬市全小学校区等将来人口推計業務報告書より作成)

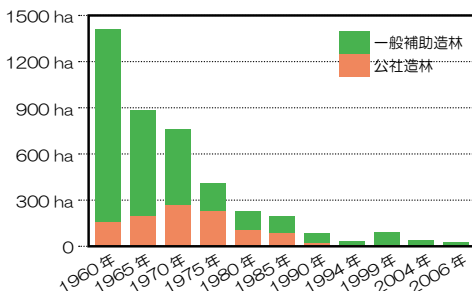
自然の恵みを活かした生業の縮小

1955年頃までは、対馬の農業人口は漁業を上回るほど多かったのですが、対馬の農地はもともと地力が弱いことや、若年労働者の島外転出などにより、現在では、1970年に比べ、農業就業者が1/5の約930人に激減しています。

対馬が長年の歴史の中で育んできた自然の恵みを活かした生業は縮小傾向にあります。さらに、それらの生業とともに地域行事や伝統的な食文化などの様々な地域文化も存続の危機にさらされています。

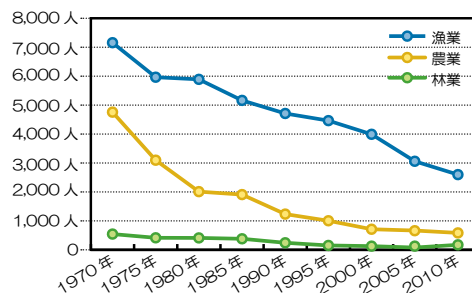


島内総生産
(2010年長崎県の市町民経済計算より作成)



新植造林面積

(平成21年度ツシマヤマメコ保護増殖実施方針(最終案)等作成支援業務報告書より作成)



第一次産業就業人口の推移

(2010年国勢調査より作成)